

# 古代の「風」の意味を考える

—甲骨文、『詩経』、『周易』そして医書—

中醫クリニック・コタカ 小高 修司

諸橋轍次『中国古典名言集（四）』の「風する馬牛も相及ばざるなり」（『春秋左氏伝』僖公四年）の解説に「風は獣のさかりのつくこと」とあるのに驚いたことが、本論攷のきっかけである。同氏の『大漢和辞典』にも、同じ書籍を引用して、⑨「さかりがつく」の意が挙げられている。ただ新釈漢文大系『春秋左氏伝』（著者の一説：孔子弟子の左丘明）や白川静『字通』では、同じ古典文を引用しても「風とは、雌雄誘いあつて駆けまわること」と有り、諸橋ほどの大胆な解釈をしていない。

いずれにしる古代における「風」字の意味するところが奈辺にあったのか、それが医学における「風邪」に如何にして連なるものなのか、を検証することが本論考の目的である。

古典の読み下し文に関しては、その使用字をそのまま用い、地の文は当用漢字を用いた。

## 1. 甲骨文字に於ける「風」の概念

周策縦（1）によると、

甲骨文字で風を意味する字は「凡」と「鳳」である。また「風鳥」とは占術の名前であるが、古巫にては「呼風喚雨」や「息風止雨」の働きがあるという。巫と伺風、祈風は関係しており、軍事或いは一般の気候観測に於いて重要な働きをするのみならず、風には古人の生の本源として、性と生命が風動により起こると考えていた。

人類を初めとするあらゆる動植物の化生・生命活動に関わる「気」の考えも、この風との関連から生じたとも考えられる。人体の気運は自然界の風気の運行と相通じ、その節理に従うものは健康であり、逆すれば病に苦しむ。

と、生の本源と関わる風の意義、また気の論理も風の運行と通じる部分があること、さらに風の運行の摂理との順逆が健康・疾病に連なることが論じられている。

より詳しく、白川静（2）は甲骨文字の解釈から、殷周代の風の概念を以下のように述べる。（挿入文字も同書より引用）

人々は風土の中に生まれ、その風気を受け、風俗に従い、その中に生きた。それらはすべて、「与えられたるもの」であった。風気・風貌・風格のように、人格に関し、個人的と考えられるものさえ、みな風の字をそえてよばれるのは、風がそのすべてを規定すると考えられたからである。自然の生命力が、もっとも普遍的な形でその存在を人々に意識させるもの、それが風であった。人々は風を自然のいぶきであり、神のおとずれであると考えたのである。（P.29）

広大な風土に、神々の意志をゆきわたらせるのは、自在な行動力をもつ神が必要であった。それで神の使者として、鳥形の神が選ばれた。風は鳳の姿にかかっている。…人々はその羽音、則ち風のそよぎによって、神のおとずれを知る。（P.30）



風はト文では辛字形の冠飾をもつ鳳の形にかかっているが、ときにはその音を示す H 形のしるしを右肩に加えることがあった。鳳はその形を加えた字形である。のち風神の観念が忘れられて、天体に関するものに龍形の神が多いところから、音符をそのままにして、爬虫類を示す虫むしを加えて風となった。そして鳳は、瑞鳥としての鳳凰の字となり、その観念も分化した。鳳から風へという字形の変化は、このようにして風塵の観念の推移に対応して起こったのである。(P.32)

自然の啓示は、風気ということばからも知られるように、風にもあらわれ、気にも示される。(P.35)

ト辞によると、四方にはそれぞれその方域を司る方神があり、方神はその方域を治めるために、風行する鳥形の神を従えていた。…鳥形の神は風神である。風はこの鳥形の神が、方神の使者として往来風行するその羽ばたきである。(P.212)

自然の息吹、神の訪れとしての風は存在し、その神の使者として鳥形の神＝風神が存在し、そこから鳳の字が風を意味するようになった。

## 2, 『詩経』などに於ける「風」の概念

次の時代つまり春秋時代の『詩経』国風では、その概念も変化していったのである(3)。

風は帝意によって起こされ、またその使者たるものであった。風は禍害を運び齎らすものとして、畏怖されており、…方神と風神とは密接な関係があり、またそれらは、風雨年穀を支配する霊力があると考えられていた。(P.413)

「風は天地の使いなり」(『文選』)

「風は天の号令」(『文選』)

「風は天の命令なり」(『易』小畜)(P.414)


風は気の動くもので、蠱気もこれによって播及し「風は百病の長なり」(『素問』玉機真藏論)ともいわれるが、これは蠱気の致すところの病をいう。方に方神があり、その風に風神があり、各々その風気を異にしている。これ風土・風俗の風の初義で、その土気よりして地方の風気・風俗の名となり、ついにその風土・風気の表象を風と呼んだ。地方的歌謡を風と称するのも、その意味である。音は風気と密接に関係するもので、古代においては、軍旅の際にも楽師を伴ってその風気を見、戦の吉凶を卜したものである。…『詩(経)』の風には、もとよりすでに風神・風蠱のような古代的観念は見えないけれども、四風八風がそれぞれ地方の土気・風気を示すという観念、また風が天の鼓動によって生ずるように、歌謡が土風・土気の表象であるとする観念は、なお顕著に存している。すなわち風とは『詩』においてはその土風・風気を示すものとしての、歌謡の意味である。…しかし「国風」の時代は、…風のもつ古代的観念は希薄化し、あるいは消滅している。(P.415)

と、このように『詩経』の時代には、殷周代と風の意義が変わってきていることが記されている。


## 3, 『易経』と諸子百家での「風」の概念

上にも述べられた『周易』を少しく検証する。通常の象伝、象伝などの解釈には、風の意味するところの解釈について、主題に合致するものが得られない。そこで探したところ、

『周易大象解』（王船山、1676）（4）に意とする点が見られたので参照した。


小畜  「乾下巽上：風（巽）、天（乾）の上に行くは、小畜なり。君子は以て文徳を懿くす。」

文徳とは礼樂をいい、巽という中和の極を建てて美善を懿くすることを云う。…小畜は、巽の風が乾の天の上に行き、意図的にその風化を万物に加えないが、自ずから万物を養っている。『論語』顔淵に、「君子の徳は風なり、小人の徳は草なり。草、之に風を上うれば必ず優す」という。しかし四時（春夏秋冬）の気は、自ずから密かに動き、無為の天化と不言の聖人の教えが行われる。（pp.637-638）

観  「坤下巽上：風（巽）、地（坤）の上に行くは、観なり。先王は以て方を省み、民を観て教を設く。」

坤には民の義有り。風は教化を司る。風、地の上を行き、之を省み之を観て、則ち以て教を設く。その用は、小畜と別なり。

「観」は方（坤）を省み民（坤）を観ることによって、初めて風化という教を設ける。「小畜」は礼樂という本を端すことによって文徳の極を立て、「観」はその時に因ることによって教化を広くする。従って教を設ける「観」の先王は、必ず民俗が剛であるか柔であるか、また樸実であるか巧偽であるかを審らかに観て、それに因って導く。すなわち「観」の下卦坤によらなければ、上卦巽の風教は功を収めることができない。（p.653）

姤  「巽下乾上：天（乾）の下に風（巽）有るは、姤なり。后は以て命を施し、四方に誥ぐ。」  
天の下の風は、徧く遠くまで行くことが出来る。

下卦巽が上卦乾の命を承け、巽が性に従って迫ることをしなければ、天下の人を尽く信従させることが出来る。言語は人を感じさせるが、巽の風のように人心に巽順でなければ、天下の心を傾動させることはできない。（p.691）

このように『周易』の中での風の意味は、天の命を承けての「風教」であり「教化を司る」ことと云えよう。

「風化」という詞には、本来性と生殖の意味を含み、風には性的誘惑の意思があり、諸子百家のなかで、最も早い例は『尚書』費誓の「馬牛其風」で、賈逵注に「風は放なり。牝牡相誘う之を風と謂う」とある（5）。これが冒頭に挙げた『春秋左氏伝』に連なることは明らかであろう。

#### 4. 医書に於ける「風」の概念

このように古人が生命と風の吹き来たることを関連付けたことが、『黄帝内経』などの医書の理論に結びついていくことは充分推測可能である。

戦国末から前後両漢にかけて、天人相関説全盛の時代に、風の考えは「正風（正邪）」「虚風（虚邪）」と呼ばれる身体の外側から侵入する邪気を重視する、気象医学的思考の発展と共に、医学理論として徐々に確立されるに至る（6）。

最古の医書として知られる『馬王堆漢墓醫書』の中の「五十二病方」（7）にも風の用例が見られる

傷瘡（注：破傷風）：瘡なる者は、傷して、風が傷に入り、身は信（伸）び、而して誑

(屈)する能わず。之を治するには… (P.54-55)

諸傷。風が傷に入れば、傷癰み痛む。治するには…を以てす。(p.56)

明らかに病因としての風邪の認識である。

更に『素問』を見ると、上古天真論篇第一に

夫れ上古聖人の教下なり。皆之れを虚邪賊風と謂い、之を避けるに時有り、恬虚無にして、眞氣之に従い、精神内を守れば、病安んじて従い來る。

天地の和を處すには、八風の理に従い、世俗の間に於ける嗜欲を適とし、恚嗔の心を無くし…。

とある。前段は上記石田の理論そのものであり、後段は白川の云う四方の風神の発展したもので、金匱眞言論篇第四に詳説(8)されている。続く四氣調神大論篇第二には、

惡氣發せず、風雨節ならざれば、白露下らず、則ち稟榮えず、賊風數しば至り、暴雨數しば起り、天地の四時は相保たず、道とともに相失う。

と、やはり風邪の論がある。さらに生氣通天論篇第三には、

魄汗未だ盡きず、形弱にして氣燂る、穴俞は以て閉じ、發して風瘡と爲る。故に風なる者は百病の始めなり。清靜なれば則ち肉は閉拒し、大風苛毒有りと雖ども、之を能く害する弗きは、此れ時の序に因るなり。

風が淫氣に客すれば、精は乃ち亡び、邪は肝を傷るなり。

と風邪が万病の元であることを説く。続いて陰陽應象大論篇第五にも、

天に四時五行有り、以て生長收藏し、以て寒暑燥濕風を生ず。人に五藏有り五氣と化し、以て喜怒悲憂恐を生ず。故に喜怒は氣を傷り、寒暑は形を傷り、暴怒は陰を傷り、暴喜は陽を傷り、厥氣は上行し、滿脉形を去る。喜怒節なく、寒暑度を過ぎれば、生は乃ち固まらず。故に重陰は必らず陽、重陽は必らず陰、故に曰く、冬に寒に傷られれば、春に必らず温を病み、春に風に傷られれば、夏に泄を生じ、夏に暑に傷られれば、秋に必らず瘧し、秋に濕に傷られれば、冬に嗽を生ず。

病因としての五淫・五情(六淫七情でなく)内傷が説かれている。

## 【まとめ】

- 1, 甲骨文字では、生の本源と関わる風の意義、また気の論理も風の運行と通じる部分があること、さらに風の運行の摂理との順逆が健康・疾病に連なることが論じられている。
- 2, 『詩経』では、その風土・風気の表象を風と呼んだ。地方的歌謡を風と称するのも、その意味である。
- 3, 『周易』の中での風の意味は、天の命を承けての「風教」であり「教化を司る」とことと云えよう。
- 4, 諸子百家のなかで、『尚書』『春秋左氏伝』など早期資料では、「風化」という詞には、本来性と生殖の意味を含み、風には性的誘惑の意思があるといえる。
- 5, 戦国末から前後両漢にかけて、天人相関説全盛の時代に、風の考えは身体の外側から侵入する邪気を重視するようになり、気象医学的思考の発展と共に、医学理論として徐々に確立され、現存の『馬王堆漢墓醫書』『五十二病方』や『素問』に窺うことが出来る。

### 【文献及び注】

- 1, 周策縦：古巫醫與「六詩」考——中國浪漫文學探源、pp.197-212、聯經出版、1989, 台北
- 2, 白川静：白川静著作集 1 漢字 I、平凡社、2000、東京
- 3, 白川静：白川静著作集 10 詩經 II、平凡社、2000、東京
- 4, 高田淳：王船山易学述義（下）、汲古書院、2000 年、東京
- 5, 文献 1 と同じ。p.209
- 6, 石田秀実：中国医学思想史 p.142-145、東京大学出版会、1992, 東京
- 7, 魏啓鵬、胡翔驊撰：『馬王堆漢墓醫書校釋(卷)』、成都出版社、1992, 四川省
- 8, 金匱真言論篇第四。

黃帝問曰。天有八風。經有五風。何謂。岐伯對曰。八風發邪。以爲經風。觸五藏。邪氣發病。所謂得四時之勝者。春勝長夏。長夏勝冬。冬勝夏。夏勝秋。秋勝春。所謂四時之勝也。東風生於春。病在肝。俞在頸項。南風生於夏。病在心。俞在胸脇。西風生於秋。病在肺。俞在肩背。北風生於冬。病在腎。俞在腰股。中央爲土。病在脾。俞在脊。